



ガンペルの工房には粗削りされた材木が積み上げられている。それらは数ヶ月から3年の間、雨ざらしにされることもある

（下）一瞬、陶器だろうかと思わせる優美なシルエット。眺めていると、瞑想的な気分に浸れる

ろくろを回して木を削る作業は、並外れた体力と厳密な正確さを同時に必要とする。工房のガンペルはまるで修行僧のようだ

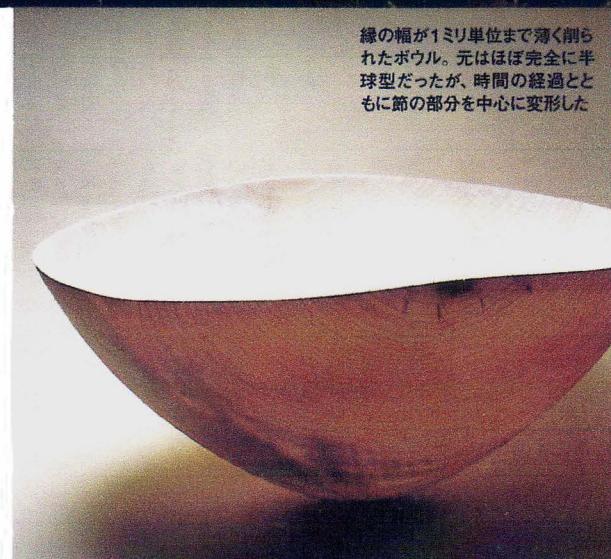
縁の幅が1ミリ単位まで薄く削られたボウル。元はほぼ完全に半球型だったが、時間の経過とともに節の部分を中心に変形した

Bowl Art of Ernst Gamperl

ろくろが生み出す 木のお椀の詩的な小宇宙

三宅デザイン事務所のギャラリースペース、MDS・Gが、2000年を機に本格始動する。その空間で、三宅一生が強く共感するイタリア在住の木の造形家、エルンスト・ガンペルが日本で初めて紹介されている。木と対話しながら生み出されたお椀には、ミニマルな美しさと古代的な詩情が同居する。

Photos: Tom Vack; Text: Itsuko Ishii

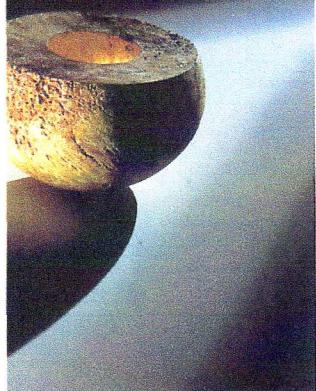


中心部は深くくり抜いてある

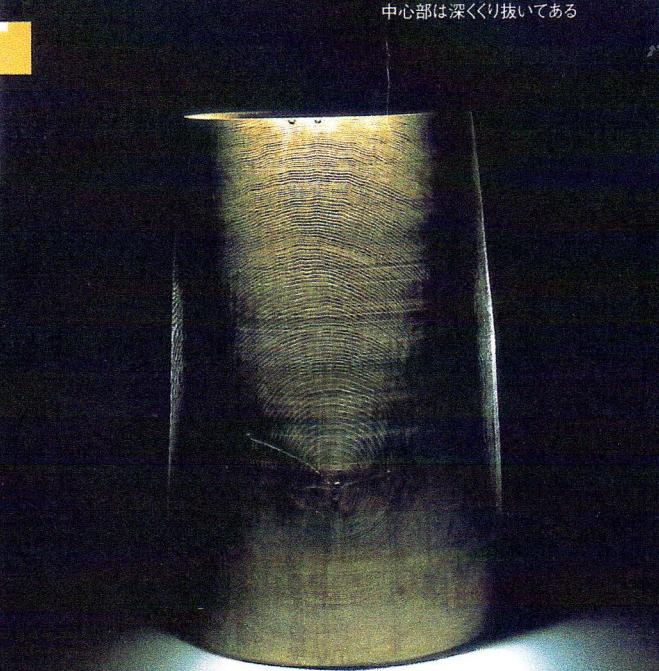


工房では、木の精工や苔生す作品と一緒に化している。

一見、無骨だが、このバランスに削り取るのは並大抵の技術ではない



くり抜いた中心部分は、また中をくり抜かれて、もうひとつ小さなボウルとなる



まるで修行僧のように、日々、木と格闘する

ろくろを回すといえば普通は土を思い浮かべるが、そこに木という素材を出合わせたのが、アーティスト、エルンスト・ガンペルだ。

あらかじめ粗削りした楓、オーク、オリーブといった材木をろくろで回しながら、並外れた直感と集中力と忍耐強さをもつて削り取ったガンペルの作品たち。あるものは光が透けて木目が浮き上がるほど緻細に。あるものはごつごつとした手触りそのままに分厚く。何千年も前から人間のいちばん身近な道具だった“木のボウル”的フォルムを借りたそれらはミニマルで古代的で、詩的な風情さえ漂わす。

「木に一生を捧げた」というガンペルは、修行僧のように来る日も来る日も木と格闘する。手に入れた材木——ときには百年ものだつたり、人が長年使つた道具だつたり——に本質的に宿るフォルムを見極め、粗削りし、中をくり抜く。くり抜かれた部分はもうひとつ小さなボウルになる。そして数カ月から3年ほど寝かせ、乾燥するのを待つのだ。その間にボウルは色が変わり、歪み、割れ目が入る。ろくろだけでは

生み出せないうねったライン、木肌の割れ目に施された留め金や縫い目は、作現したようで、えもいわれぬ魅力を醸し出している。

ガンペルは1965年ドイツに生まれ、大工の親方や木工細工職人の下で基礎技術とクラフトマンシップを身につけた後は、ひたすら独自の道を歩んでいた。今は古典建築への憧れからイタリアを本拠地にしている。あらゆる芸術に関心があり造詣も深い彼は、1年に100以上もの作品を生み出す自分の仕事について、ジャズ・ミュージシャンの言葉を引用しながら語る。「繰り返し同じ手法のインプロビゼーション(即興)を行っても、常に同質なものを再現することは不可能なのだ。演奏するたびに新たなハーモニーが織りなされることは、なんと素晴らしいことだろう」と。

「作ることの本質がある」と、ジャンルを越えて感動を誘う

冒頭でも紹介したように、この展覧会は、三宅デザイン事務所のギャラリースペース、MDS・Gの第一弾。今後も年4回、三宅一生のほか、建築家の坂茂、写真家の安藤重男、アート・プロデューサーの小池一子の4氏が企画委

員となつて、国内外のアーティストを紹介していくという。デザイン、ファッショング、アート、工芸といったジャンルは問わない。基準は「ものを作る姿勢、表現する姿勢が明確にあること」だという。ジャンルの枠組みと関係なく、自分の目だけでアーティストの本質や可能性を見抜き、後押しすることは難しい。

買つた人間がはさみを入れて自由に衣服を作るという「A・P・O・C」(エイ・ピック)プロジェクトを立ち上げた三宅は、自然に逆らわず、無駄にせず、素材が語りかける本質を生かす、というガンペルの作家性に強く共感するという。展覧会場では三宅の発案で、作品展示だけでなく、作品が内包する時間でも観客に体験してもらうために、制作のプロセスを示すインсталレーションが紹介されている。まるでガンペルの工房が引つ越してきてきたような空間の中で、作ることの楽しさを共有したい。

【GAMPER】の造形——木とろくろが出会つた
3月18日まで 日曜月曜定休
MDS・G 東京都渋谷区大山町36-18
☎03-3481-6711

